

妹を選んだ婚約者様、もはや貴方は要りません
く寝取られたら完璧な人生が始まりましたく



クロヴィス・ルーホン

ルーホン公爵家の跡継ぎで、
第一王子の側近。
主と同じくするマリアベルに対して、
とある想いを抱いている。

オズワルド・ラフォルグ

ラフォルグ侯爵家の跡継ぎで、
マリアベルの元婚約者。
結婚式間近にマリアベルに
婚約破棄を告げた。

リリアン・ハインツ

ハインツ子爵家の次女。
マリアベルからありとあらゆるものを
奪って生きてきた。

エリザベス・ルーホン

クロヴィスの妹で、
レオンハルトの婚約者。
マリアベルに憧れを抱いている。

レオンハルト・ネムス

ネムス王国の第一王子。
マリアベルを姉のように慕っている。

マリアベル・ハインツ

ハインツ子爵家の長女。
妹ばかりを優先する両親に嫌気がさして、
一人王都に出て第一王子の
侍女として働いている。

登場人物 紹介

プロローグ

ここはネムス王国、遙かなる山脈に抱かれた自然豊かな王政国家。
四季折々に姿を変える美しい風景は、この国を語る上で欠かせないものです。
色とりどりの花が咲き誇る春、涼やかな風が野を駆け抜ける夏、実りで大地が黄金に染まる秋、
深々と降り積もる雪に閉ざされ静寂が広がる冬――

そのすべてが、この地に生きる人々の暮らしを豊かにしてまいりました。
そして私が暮らす王都フォリウムもまた、そうした自然の恩恵を受けていつも賑わいを見せてお
ります。

石畳の大通りを中心にレンガ造りの建物がずらりと立ち並び、通りを行き交う人々の声と笑顔が
街に活気をもたらしているのです。

しかしこの国での暮らしには少々不便がつきまといます。夜の闇を照らすのは蝋燭やランタンの
小さな明かりだけで、冬の寒さを凌ぐ手段も暖炉と厚手の外套ぐらい。

なぜこのような状況に陥っているのかと理由をご説明いたしますと、平民の識字率の低さにあり
ます。

ここネムス王国では印刷技術がまだ十分に普及しておらず、書物は一字ずつ手書きで記されているため、非常に高価で流通量もごくわずか。その結果、書物を手にできるのはごく一部の者に限られ、平民にはその機会すら与えられていないのがこの国の現状です。

このような状況が続いた結果、技術の発展も近隣諸国に比べて大きく遅れをとってしまっているのです。したがって我が国は現在、隣国のアウラ王国より技術支援を受けて発展途上にあります。

とはいえ、悪い部分ばかりではありません。

自然に恵まれたこの国では野菜や果物、穀物が豊かに実りますし、川や湖には魚も多く食料にはこと欠きません。ですから普段の生活は厳しくとも、貧しい者にも一杯のスープとパンがいきわたるような豊かな国なのです。

第一章

——そんなネムス王国の王宮において。

私マリアベル・ハインツは、この国の第一王子であらせられるレオンハルト殿下の侍女を務める、どこにでもいるような地味顔の二十三歳の子爵令嬢でございます。

ただし地味顔とは申ししても、決して不細工というわけではありません。

灰を被ったような銀髪に切れ長の瞳という平凡な容姿で華やかさはありませんが、顔立ちはそれ

なりに整っている方だとひっそりと自負しております。

そしてその証拠というわけではございませんが、私はほんの少しばかり異性から人気があったりするのです。

……そう。なにを隠そう私マリアベルには素敵な婚約者がおります。

それは親が決めた政略結婚のお相手ではなく、自分達で決めた生涯の伴侶^{はんりよ}。

つまり私は、貴族社会ではたいへん珍しい『恋愛結婚』をする予定でございます。

この国で貴族の結婚といえば、その殆どが政略結婚。そこに当人達の感情が介在する余地は殆どありません。なぜなら、貴族にとって婚姻とは家同士の契約であり、感情よりも利益が重視されるものだからです。

しかしながら世界に目を向けますと、愛するお相手と結ばれる貴族はそう珍しくはないのです。それはひとえに『愛』という感情は、この世界を創造された神様から、争いをやめられぬ愚かな人間への『贈り物』だという考えに則ったもの。

とはいえ、この国の貴族社会では稀^{まれ}な恋愛結婚ですから、私たちの婚約は一筋縄にはまいてませんでした。なにしろお相手は侯爵家の嫡男^{ちやくなん}で、子爵家令嬢の私では釣り合わない。ゆえにそれなりの苦労はありましたが、やつとのことと結婚のお許しをいただけたのです。

そして私は、侍女の仕事と三か月後の結婚式の準備でそれはもう忙しく、けれど充実した毎日を経^へておりました。

——そんないつもと変わらないある日の穏やかな昼下がり。

レオンハルト殿下にお渡しする予定の書類を整理しておりますと。

私の婚約者、侯爵家嫡男オズワルド・ラフォルク様からの突然の呼び出し。

勤務中の私をオズワルド様が訪ねてくるなど初めてのことで。どこかで胸騒ぎを覚えて、侍女仲間達に残りの仕事を託して応接間へと急ぎ足を運びました。

すると応接間では、オズワルド様がなにか思い詰めたような難しい顔をして待っていらしたので
す——

「ごきげんようオズワルド様。お会いできてとても嬉しいですわ。ですが……いったいどうされたのです？ わざわざ王宮まで足を運ばれるなんて、なにか私に火急の要件ですか？」

「マリアベル、その、すまない……」

オズワルド様が前置きもなく頭を下げて謝罪の言葉を口に出したので、私は目を見張りました。

謝罪される理由など、なに一つ思い浮かばなかったから。

「あの、突然どうされたのですか？ 頭をお上げくださいませ」

「……私は君と結婚することができなくなった。だから別れてくれ」

「えっ……結婚、できなくなった？」

……はて？ 私とは結婚できなくなった？ それは、どういう？

あまりにも突飛な内容に私の思考は追いつきません。

「私はリリアンと——君の妹と結婚することにした」



「え……は？ リ、リアン？ 私の妹と、結婚……それはいったいどういう……？」

『リアンと結婚する』

オズワルド様がなにをおっしゃっているのか、私には到底理解ができません。

だって私達は三ヶ月後に王都にある教会で、ささやかながら幸せに満ちた結婚式を挙げる予定で、それなのに私の妹とオズワルド様が結婚をする？

……それって、つまり。

「リアンのお腹の中には今、私の子がいるんだ。だからマリアベル、ここは大人しく引き下がってはいけないだろうか？」

「リ、リアンのお腹の中にオズワルド様の赤ちゃんがいらっしやる……？」

「ああ、そうだ」

「ちょ、ちょっと待つてくださいませ！ それはいつたい、いつの間に!? 私とオズワルド様なんて軽いキスしかしたことがございせんのに！ いやそもそも、いつの間に二人は会っていたのですか？」

リアンがいる実家の子爵家は、この王都から馬車で片道二日の距離。頻繁ひしぱんに行き来できるような距離ではありません。

「それは、その、だな……」

私の質問にオズワルド様は終始しどろもどろで、なかなか要領を得ません。

それに『結婚できない、別れてくれ』なんて、そんなことを急に言われても、ハイソウデスカと

簡単に応えられるわけがありません。私達は既に周囲の方々に報告を済ませて招待状も送っておりますし、ウェディングドレスのお直しだって終わっているのです。

「マリアベルお姉様、ごめんなさい！ 私がオズワルド様を好きになってしまったの、だからオズワルド様を責めないであげて？ 彼は私とお腹の子のことを思っていて……」
そんな風に愕然がくぜんとする私の前に突然姿を見せたのは、子爵家にいるはずの妹。
リアンはこの展開を待っていたかのように、とてもタイミングよく現れました。

「リアン!? どうして君がここに？ マリアベルと話すのは私一人で大丈夫だと言っただろう。君は家でゆっくりしていないと駄目じゃないか」

「その、ごめんなさいオズワルド様。貴方のことが私、とても心配で……」

そう言ってリアンは、肩を震わせて大粒の涙をポロポロと溢します。

その姿を見たオズワルド様は、なんの躊躇ちゅうちよもなくリアンを優しく抱きしめました。
婚約者である私が見ているその目の前で。

「リアン！ 君はなんて優しく健気な子なんだ！ 大丈夫、君と腹の子は私が絶対に守ってみせる。だから泣かないでくれ」

「オズワルド様……はい、私、もう泣きません！」

今、私はなにを見せられているのでしょうか。
心臓が握り潰されたように苦しくて痛い。

「マリアベル。君には悪いことをしたと思っています、だがリアンは妊娠中で今はとても大事な時

期なんだ、あまりいじめないでやってくれないか」

「なっ……いじめ!?」

「それに先程も言ったと思うが、こうなってしまった責任は全てこの私にある。だから責めるなら私を責めてくれないか?」

私はまだなにも碌に発言しておりません。オズワルド様にはんの少し事情を伺っただけ。

それなのになぜ私が、二人を責め立てたことになっているのでしょうか。

「どうして……! どうしてですかオズワルド様? 愛していると、永遠の愛を誓うと、あの日私にプロポーズをしてくださいましたのに! あれは……嘘だったのですか!?」

「私は真実の愛を知ってしまった。リアンのような素晴らしい女性がこの世界にいるなんて、私は彼女に出会うまで知らなかった。だから私は……本当に愛するリアンと結婚する」

「つ……オズワルド様がおっしゃりたいことは一応ですがわかりました。ですが……この仕打ちはありませんにも酷いのでは? もう結婚式まで日がないのに……どうしてこんなことを……!」

結婚式まであと三ヶ月。それなのに今さらこんなものって。

「君が怒るのもわかる。だがわかってくれ、マリアベル」

「私はいったいなにをわかればよろしいのでしょうか? 婚約者に裏切られて、結婚式まであと三ヶ月というところで捨てられてしまうこと……でしようか?」

「うっ……そ、それに今回のことで、君には相応の額の慰謝料を渡すつもりだ。だから……!」

「お金なんかで! 貴方はこれが許されると、本気で思っというらしいのですか!」

私はふつふつと沸き上がってくる怒りに任せて、つい声を荒らげてしまいます。

溢れだして抑えられない怒り、それは私を裏切ったオズワルド様のせい。でもその姿はきつと可愛くなくて、こんな姿を彼にだけは見られたくはなかった。

だって貴方は私の地味な容姿を初めて可愛いと言ってくれた特別な人。

だから貴方には、笑顔の可愛い私だけをずっと見ていて欲しかったのに、どうしてこんなことになってしまったのでしょうか?

「マリアベル、つまらない我儘を言っていないで大人しく私の言うことを聞きなさい。それにまだ結婚もしていない他人の君に、本当は金を払う必要なんてないのだぞ?」

「なっ! 他人って……」

「この金はリアンが……急に結婚できなくなった姉が可哀想だと言うから用意したものだ。慈悲深い妹に君は感謝したほうがいい」

『リアンに感謝しろ』と、私に言い放ったオズワルド様の声はひどく冷たく淡々としていて。私にはもうなんの感情もないということが、その声音だけで窺い知れてしまっ

たのだと、理解したくないのに私の頭は理解してしまいました。そして妹に婚約者を奪われたのだと、そんな私とオズワルド様を、それは楽しそうに横目で眺めていたリアンは。

「ふふっ! 私が慈悲深いなんて、オズワルド様は褒め過ぎですわ。私はただ、お姉様に申し訳なくて……」

などと白々しく言うのです。

「リリアン、君は本当に優しくて心が清らかな、聖母のような女性だな。私の子が君のお腹の中にいることを嬉しく思うよ」

「あら、お優しいのはオズワルド様ですわ！ 私の我儘^{わがまま}を聞いてくださって、可哀想なお姉様にお金を用意してさしあげるなんて」

そしてリリアンは怒りに震える私を見据えて、勝ち誇ったように笑います。

「オズワルド様、私はこんな一方的な婚約破棄は絶対に認めません。それにいくらなんでも貴方とリリアンの結婚なんて周囲が認めませんよ？」

「認めぬものにも、君がいくら嫌だと言った所で全て無意味。それに君のご両親に許可は既にとつてある。だから君が拒否しても無駄だ」

「両親に許可？ それ、どういう……」

「君と私の婚約破棄、そしてリリアンと私の婚姻の許可だ。だからもう私達の前に現れないでくれマリABEL、君はもう邪魔な存在なんだ」

そう最後に冷たく言い放ったオズワルド様は、大事そうにリリアンの肩を抱いて私の前から去っていきましました。

そしてその場にたった一人、残されてしまった私は。初めて愛した人に裏切られた悔しさと婚約者を奪っていった妹への憎しみで、その場で泣き崩れてしまいました。

——妹のリリアンは、昔から私が持っているモノをなんでも欲しがりました。

同じモノを両親から買い与えられていたとしても、たとえ自分が欲しくなかったとしても、お姉様のモノ^{もの}が^{わがまま}いいと我儘^{わがまま}を言つてすべて奪っていきましました。

そんな我儘^{わがまま}なリリアンのことを私は面倒な妹だとは思っていたけれど、小さい頃はまだそこまで嫌いじゃありませんでした。

だって小さい頃は奪われるのはお人形やドレスで、我慢できたから。

けれど年齢を重ねるとリリアンが奪う対象が、モノだけでは収まらなくなりました。

私が大好きだった家庭教師の先生は、リリアンが嫌いだからと解雇^{かいこ}されました。その人のことを私がどんなに慕っていても、私の願いは聞き入れられることはありませんでした。

そして両親はことあるごとにリリアンと私の容姿を比較して、差をつけました。

「妹のリリアンは花の妖精^{ようせい}のように可愛いというのに姉のお前ときたら……その地味な容姿、なんとかならんのか？」

そうやって両親はあからさまに妹ばかりを鼻^{ひいき}屑^{くせ}しました。

ですが私は別に、自分のことを不細工とは思っておりませんでした。だって少し色彩が地味なだけなのです。けれど華やかな容姿のリリアンと比べられるたびに憂鬱^{ゆううつ}になりました。どうして私はこんなに妹と違うのだろうか。

そして両親は花の妖精^{ようせい}のようなリリアンを『可愛い』と甘やかし、地味な私には『姉なのだから』と口癖のように言つて我慢を強いました。

リリアンと私は、たった一つしか年齢が合わない姉妹なのに。

そんな両親は妹が欲しがれば私のものをなんでも取りあげて、妹に渡すのです。

そうして私から奪うことに成功したリリアンは嬉しそうに可愛く笑うから、いつしか妹のことが私は大嫌いになりました。

そして妹を最^{ひいき}肩^{かた}して大事にする両親にも、私は嫌気が差してしまいました。

したがって私は成人したら辺境の実家を直ぐに出て、一人で王都へいくことを決めたのです。

私からなんでも奪う妹、そして妹を最^{ひいき}肩^{かた}して優先する両親から離れたくて。幸いなことにリリアンにしか興味のない両親は、私が家を出ることをまったく反対しませんでした。

ですがリリアンだけは私が出た家を出て働くとなると。

「お姉様、貴族令嬢なのに家を出て働くなんて……そんなにお金が好き？ 恥ずかしいからやめてよ」

と、軽蔑^{けいべつ}するように言っておりましたが、邪魔はしてきませんでしたので。これ幸いと放っておきました。

——そして私は十八歳の成人を迎えてすぐ、家を出て王都フォリウムに向かいました。

実家のある辺境の地から王都までは乗り合い馬車で約二日、不安を覚えつつも到着した王都は辺境の廃^{すた}れた田舎町とは大きく違っていました。レンガ造りの大きな建物がずらりと立ち並び、数えきれないほど多くの人が街を行き交っていて。私の胸は大きく高鳴りました。

「ここが王都、ですか。すごい……！」

不安と期待、そして解放感。色々な感情が織り交ぜになってこぼれ落ちます。

ですがぼんやりとしている時間なんて私にはありません。

私はこの王都に遊びに来たのではないのです。

一人で生きる為にやってきたのだから。

しばらくの間知人のいる教会に身を寄せさせてもらった私は、ある日ネムス王国の王宮を訪ねました。どうして王宮を訪ねたのかといえば。

貴族令嬢は基本的に労働などしませんが、行儀見習いの為に王宮にやってくる令嬢は一定数存在します。ですから、こんな私でもできるお仕事がなにかあるのなら、メイドでもなんでもいいから働かせてほしいと思い王宮を訪れたのです。

すると、侍女の採用試験が近々あると教えてもらい。勧められるがまま侍女採用試験を受けたら、驚いたことに合格出来たらしく。畏れ多くもこのネムス王国の第一王子殿下のもとで、侍女として働かせていただけることになったのです。

私の実家は貴族とはいっても辺境にあるあまり豊かではない子爵家ですので、王宮で侍女をやらせていただけるとは夢にも思っておりませんでした。

ですから侍女として働ける喜びよりも、やっていけるのかという不安の方がとても強かった。

しかし私を採用してくださった侍女長様に恥をかかせるわけにはいきません。

泣き言を言っている暇があるのなら、その時間を勉学に費やし不安を取り除けばいいと決意して。

——気持ちも新たに。これからお仕える第一王子殿下がいっしょやる銀獅子^{ぎんじし}宮^{みや}まで侍女長様に

案内していただきました。

「君が私の新しい侍女？」

「はい、ハインツ子爵家の長女マリアベルでございます。これから誠心誠意、この命が続く限り忠誠を誓いレオンハルト殿下にお仕えさせていただきますたく存じます」

そこにいらしたのは王族としての気品や威厳いげんを纏まとわれたレオンハルト殿下と、側近の方々でございました。

「よろしく、マリアベル。でもここでは緊張せずのんびりしていてよ？ 私はあまり、堅苦しいのが好きじゃないんだ」

「はい、かしこまりました。レオンハルト殿下の仰せのままに」

この日初めてお目にかかったレオンハルト殿下は、まだ十二歳になったばかりで幼さの残る年頃でありながら、身分に関係なく下の者にも気さくに声をかけてくださる慈悲深い方でございました。

「うん、まあ……気楽にやってね？」

「はい！ 誠心誠意努めさせていただきます！」

——こうして。

レオンハルト殿下の侍女としての生活が始まり、王宮での暮らしにも少し慣れてきたとある日のこと。予定されていた公務を終えて、私室へ戻ったレオンハルト殿下はどこか疲れた様子でございました。

「おかえりなさいませ、レオンハルト殿下」

「ただいま、マリアベル。でもまたすぐに出るよ、この後も予定が立て込んでいてね……」

「……レオンハルト殿下、差し出がましいとは存じますが、お顔に疲れが出ていらっしゃるようです。少し休憩なさってはいかがでしょうか？」

「あ……そうだね。確かに少し疲れているかも。ちよつとだけ休もうかな」

「はい、ではこちらでお休みください。温かいお茶もございますゆえ」

本日は爽やかな香りのハーブティーと、甘い蜂蜜はちみつを使ったパンケーキを用意いたしました。疲労には糖分をおとりいただくのが一番。

いつもよりたつぷりと蜂蜜はちみつをかけて召し上がっていただきましたよう。

「わ……すごい！ なにも言っていないのに欲しかったものが出てきた」

「ふふ、それはようございました」

そしてレオンハルト殿下は、一口お茶を飲むと小さく息を吐き、心地づかれたようでございました。……ですがほんの一瞬、痛みを堪えるようなお顔をされたのです。

「レオンハルト殿下、どこか痛みますか？」

「え、あー……うん、大丈夫。なんでもないよ」

「……左様でございましたか、失礼いたしました」

レオンハルト殿下にお仕えしてからまだ日も浅く、まだそのひととなりを把握しきれておりませんでした。それでも幾つかわかったことがあります。

レオンハルト殿下は不快なことがあっても多少のことなら我慢なさってしまうのです。それゆえ私達、仕える者がそれに気づかないといけません。

レオンハルト殿下の様子を注視しておりますと、右足を僅かに気にしているよう。

もしかしたら靴のサイズが合わず足が痛むのかもしれないかもしれません。私はそつと扉の外で控える小間使いに指示をいたしました。きっと明日には靴職人による調整が入るでしょう。

「ん……あれ？ マリアベル、これ昨日とは違う本？」

「はい。レオンハルト殿下が昨夜『内容が重くて読むのが疲れる』とおっしゃっていたので、本日は気軽に読める物語を用意いたしました」

「マリアベルは本当になんでも出来ちゃうんだね、すごいよ」

「これくらいのこと、侍女としてあたりまえでございます」

「これが当たり前……か。マリアベルは本当にすごいね」

「過分なお言葉ありがとうございます」

レオンハルト殿下はあたりまえのことをしているだけで褒めて下さる、慈愛に満ちたお方で。

この日私は、この素晴らしき主に一生付いていこうと胸に固く誓ったのです。

そしてこの広い王宮で、私は素晴らしい主や上司、優しい同僚に囲まれて充実した日々を過ごし、狭い子爵家での憂鬱な日々が遠い昔のことを感じられるようになった頃。

——オズワルド様に出会ったのです。

それは我が主レオンハルト殿下と、公爵令嬢であるエリザベス様との婚約発表の夜会。

齡十五歳になったレオンハルト殿下は、私が仕え始めた三年前よりさらに一層凛々しくご成長されて。ネムス王国一の美少女だと有名なエリザベス様の隣に立つてもまったく引けをとらない、いやいやそれ所か。美男美女という言葉が正にこのお二方の為にあるものではないかと考えてしまうくらい、それはもうお似合いのお二人でございます。

この婚約発表の特別な夜会に立ち会うことができた喜びに、私が感動し涙ぐんでおりますと。

——パシヤ。

「あっ……」

「え？」

よそ見でもしていたのか、オズワルド様が赤ワインを溢されました。芳醇な香りの赤ワインがポタポタと滴る、私のドレスが完成した次第で。

「す、すまない！」

「いえ……お気に為さらず」

オズワルド様は慌てて私のドレスをハンカチで拭うけれど、赤いワインの染みはドレスの裾に広がっていくばかり。お給金をはたいて初めて買ったドレスは、見るも無惨な状態に。

「本当にすまない。君がいるのに気がついていなかった。美しいドレスなのに、駄目にしてしまったな」

「安物のドレスですので……」

私のお給金一ヶ月分。

レオンハルト殿下に恥はかかせられないと一大決心をして買ったドレス。でもこれはただの既製品、この夜会に参加されているご令嬢達の豪華な特注品のドレスに比べれば安物です。

「なにを言う！ とても美しいドレスじゃないか。それに君によく似合っている」

「え？ あ、ありがとうございます……」

「このドレスを元に戻せればいいが、たぶんできそうにない。だからその代わりと言ってはなんだが、新しいドレスを君に贈らせては貰えないだろうか？」

「え!? いえ、そんなことをして頂かなくても大丈夫……」

私はその申し出をお断りしようとする。

「大丈夫などではない、それに私が君にドレスを贈りたいんだ！ これはもちろんドレスを駄目にしてしまった詫びの意味もあるが、君とお近づきになりたくてね？」

「え……」

「是非貴女の名前を私に教えてはくれないだろうか？ 可愛い人」

誰かに『可愛い』と言われたのは、この時が生まれて初めてのことでした。ただのお世辞だろうと思いましたが、それでもとても嬉しかったことを今でもよく覚えております。

そして夜の翌日。

私が着ていた既製品のドレスとは、比べ物にならない豪華なドレスを贈ってくださりまして。ドレスのお礼を伝える為にもう一度お会いすれば、お礼よりも一緒に食事したいと望まれまして。

それからオズワルド様にお会いする機会が増えて、一緒に過ごすうちに私達は想いを通わせ、お付き合いをするようになったのです。

そして出会ってから一年を迎えた記念日のデートで。

『結婚して欲しい』と、オズワルド様は私にプロポーズをしてくださったのです。

私は子爵家の令嬢で。侯爵家嫡男のオズワルド様と結婚だなんて、どんなに想い合っても叶わないと諦めていました。だから、結婚できなくても一緒にいられるのなら、恋人のままで構わない。そう思っていました。

それなのにオズワルド様は、プロポーズしてくださった。

そのお気持ちに本当に嬉しかった。だけど私達の結婚はきつと周囲が許してはくれません。だから一度はお断りいたしました、オズワルド様の負担になりたくなくて。

ですがそんな私にオズワルド様は。

「そんなものは関係ない。私は君を愛している、周囲は後から認めさせればいい」と、おっしゃってくださいました。

ですから私は覚悟を決めて、そのプロポーズを承諾することにしました。

そして当初の予想通りオズワルド様のご両親は私達の結婚についてとても強く反対されました。でも、それは最初から予想しておりましたから、それほどショックではありませんでした。

それに何度かオズワルド様のご両親とお会いして、お話をさせて貰う内にお義母様が。

「マリアベルさんなら、この家に嫁いできてくれても構わない」

と、おっしゃって。頑なに反対されていたお義父様を説得してくださったのです。そうしてついに私は、オズワルド様の正式な婚約者に！

それからの日々はただただ幸せで、それでいて結婚式の準備と侍女の仕事で忙しく、あつという間に婚約期間が過ぎ去っていきました。

オズワルド様との結婚について私の両親には、手紙で許可を頂いておりました。侯爵家嫡男との結婚ですので、普段私に関心のない両親も珍しく褒めてくれて、嬉しかったです。

……けれど。

「結婚前に一度貴女の婚約者様にお会いしてみたいから、二人でこちらに遊びに来ない？ 婚約祝いの宴を開くから」

と、手紙で両親は言ってきました。

……本当に困りました。だって私は妹のいる実家になど、絶対に帰りたくはなかったから。

だから何度もその打診をお断りしていたのですが、痺れを切らした両親がオズワルド様に直接手紙を送ってしまい。その手紙を受け取ったオズワルド様が、結婚前に一度私の両親に挨拶がしたいとおっしゃって。

妹のいる実家になんて、婚約者を連れて行きたくはありません。だから妹の性格やこれまでの行い、妹を鼻屑する両親についてオズワルド様に全て話しました。生家の恥を晒すようでとても恥ずかしかったけれど、話さなければわかって貰えないと思ったから。

けれどそれを聞いたオズワルド様が。

「それでも私は君のご両親に、結婚前に一度正式にご挨拶がしたい。これからは私がマリアベルを守ると思えたいからね？」

と、私を説得してきました。

行きたくはありませんでしたが、オズワルド様を連れて両親に会いに行くことになったのです。

……今なら絶対に連れていくことはなかったでしょう。

ただ、もしかしたら最初からこうなる運命だったのかもしれないと思ったりもするのです。今となつてはもう、考えた所でなんの意味もありませんが。

それにあの時、妹のいない平和な生活に慣れて、少し樂觀視してしまっていた自分も確かにいたのです。だって王宮で私達が結婚することを知らない者はいないし、結婚の承諾もお互いの両親に貰っている。妹が彼を奪おうにも、実家の子爵家から王都まで時間もお金もかかる。

だから流石の妹もどうすることもできないと、私は思っていました。

でも、それが全て間違いだったのです。

……オズワルド様に婚約破棄を告げられてから。

私は直ぐに実家に帰り、両親を問いました。

本当に私の婚約破棄を認めたのか。二人の結婚を認めたのか。そしてどうしてオズワルド様がリアンに会いに来ていた時にそれを止めなかったのか。なぜ私に知らせなかったのかと。

両親は嫌そうな顔をしたけれど、ここで引き下がる訳にはいきません。

そしてようやく返ってきた答えは。

両親との顔合わせの席で、オズワルド様は可愛い妹に一目惚れ。そして彼は私になにも言わず、遠路はるばる辺境の地までリリアンに会いにくるように。そして一目惚れしたのはリリアンと同じで。それから二人は何度も何度もこの子爵家で、私に隠れて逢瀬を繰り返した。

その結果婚前交渉はご法度のこの国で肉体関係をもった挙句、リリアンの妊娠が発覚した。それを知ったオズワルド様は、非情にも婚約者の私と妹を天秤にかけた。

結果、地味な私が捨てられ可愛い妹が選ばれた。

「でもね、マリアベル。それは当たり前のことじゃない？ オズワルド様が来ていたのを貴女に知らせなかったのは私達も悪かったと思うけれど、幸せそうなりリアンを見ていると邪魔したくなくてね？」

そしてこの時両親は、孫ができたそれはおおいに喜んで、二人の婚姻をすぐに認めたのだと悪びれもせずに私に宣ったのです。

「それにお前は姉なのだから、幸せを掴んだ妹の邪魔なんて無粋な真似はせず、大人しく金だけ受け取って引き下がらなさい」

と、婚約者に捨てられて傷付いた娘の私に、お父様はまるで叱り付けるように酷い言葉を言い放ったのです――

――ほんの数日前の出来事です、思い返すと頭が痛くなります。
一息ついて、私は目の前にいる友人に向き直りました。

「ということまで……いま思い返すと、オズワルド様との出会いはナンパというヤツだったのだと、私は思うのです。そして彼は不誠実な男だったのです！」

「え……今さらそれに気付いたのか!？」

「へ？ 気付く……?」

「……夜会で女性のドレスにワインを溢して弁償するその流れで、後日会う機会を作る。なんて、昔ながらのナンパの遣り口だろ?」

「えっ……そ、そうなのですか!？」

「そうなのですか、マリアベル……もしかして知らなかった?」

そう私に教えて下さいましたのは、レオンハルト殿下の側近の一人、クロヴィス・ルーホン公爵家子息。弱冠十九歳ながら宰相補佐を担い、将来は宰相だと周囲から期待されるお方。

そしてエリザベス様の実のお兄様。つまり、ルーホン公爵家の後継なのですが、とても気さくな性格で、光栄なことに私の友人なのです。

そんなクロヴィス様は私が婚約破棄されたことをどこからか知って、心配してわざわざ私の部屋を訪ねて来て下さいました。なんて友人思いの素晴らしい方なのでしょう。

「そ、そんな手法知るわけありません！ 知っていたなら、どうしてあの時私に教えてくださらなかったのですかクロヴィス様!」

「いや、だって……『素敵な殿方に運命的に出会った』とか言っすごく幸せそうにしていたから『それナンパだろ?』なんて言い出せなかったんだよ……ごめん、マリアベル。こんなことにな

るなら言つてあげればよかったな……」

「あ……いえ、こちらこそすいません。なんかもう頭がいっぱいで……クロヴィス様が悪いわけじゃないのに」

「あ、いや……！ こっちは大丈夫だけど。マリアベルがそれだけ俺を信用してくれているということだし、逆に嬉しい……」

クロヴィス様は、友人である私を心配して来てくれただけ。それなのになにも悪くないクロヴィス様に八つ当たりみたいなことを言ってしまうなんて。

「ほんと私、ダメダメですね。四つも年下の友人に八つ当たりをするなんて、もう恥ずかし過ぎて穴があつたら入りたいくらい」

「まあ、そうだな……三ヶ月前に婚約破棄だなんて余裕が無くなって当たり前だよ。だから俺のことは気にしないでいい。話ならいくらでも聞かし、もつと頼つて？」

「ありがとうございますクロヴィス様。私は素敵な友人に恵まれてとても幸せです」

「え？ あ、うん、友人……」

クロヴィス様はなんだか浮かない表情ですが、私はそれどころではありません。

結婚式まであと三ヶ月という所に来て、妹に婚約者を寝取られた。

そして私から婚約者を奪った妹のお腹の中には、婚約者の赤ちゃんがいて。

私を捨てた婚約者は妹と結婚する。

そして味方になってくれるはずの両親は、姉の私が我慢すべきだと言う。

私に起きてしまった現実を箇条書きにしていきますと婚約者と妹の行いはなかなか最低ですし、両親も酷いです。私が貴方達にいったいなにをしたというのでしょうか、ここまで酷いことをされる謂れはないはずです。

「私は決めました。もう恋はしません、そして恋人なんて一生作りません。それに結婚なんて絶対しません！ 特に爵位が上の方とは！ オズワルド様のバカ！ 愛しているって、君だけだつて……言つたくせにっ！ 妹と浮気するなんて……」

「え!? いや、ちよつと待て！ マリアベル！ その男がクズだっただけで諦めるのはまだ早い！ と、俺は思う！ 他にもさ、目を向けて見よう!? あと爵位は関係ない……」

「いえ、私はもう一生独身でいいのです……こうなったら侍女として高みをとことん目指します！」
「え……まあ、それも選択肢の一つだとは思うけどさ。こんなことで一生を左右する決断はしないほうがいい！ だつてお前のこと、本当に好きな男が意外と近くにいるかもしれないし！ マリアベルが気付いていないだけでさ、ほら……ここかに！」

「クロヴィス様のおっしゃることは理解できますが、私はもう疲れてしまいました。もう恋愛も結婚も懲り懲り！」

涸れるまでたくさん泣いたはずなのに、これまでのことを思い出すとまだ涙が出てきてしまう。

「……うん、そうだね。あ、じゃあ実家のご両親には？ 会いに行つてきたんだろ？ ちゃんと相談はした？」

「クロヴィス様、それ……本当に聞いてしまいます？」

「あ、もしかして家になにかあった？」

「実家で両親には『妹は妊娠しているのだから彼を譲ってあげなさい』そして『それに貴女は姉なのだから我慢しなさい』と言われました」

「うわ、それはまた……なんというか、酷いな」

両親は元々可愛らしい容姿の妹にはとても甘くて、^{ひいき}最^{ひいき}肩^{ひいき}ばかり。もちろん私もそれを知っておりました。けれどここまでくると流石におかしいでしょう。

容姿はリアンに比べれば地味かもしれませんが、私も両親の娘。

なのに、姉の婚約者を寝^ね取^とったふしだらな妹を叱^とるどころか、私を叱^とるなんて。

「なので両親とは絶縁してまいりました！ もうあんな人達のこと、親とは思いません」

「マリアベル……」

そしてクロヴィス様は『辛かったな』と言って、ずっと側で私の話を聞いてくださいました。

なんて友人思いの優しい方なのでしょう？

私は親にも妹にも婚約者にも恵まれませんでしたが、仕事や友人達にだけは恵まれたらしいです。仕事といえば……

「レオンハルト殿下。私事でたいへん申し訳ないのですが、もう少しだけお休みを頂けませんでしょうか……」

私は、事実確認のために一度実家に帰ることを余儀なくされ、何日も侍女のお仕事をお休みしておりました。ですからこれ以上、皆様に迷惑をお掛けするわけにはいかないのですが。

今回の婚約破棄は少々精神的なショックが強かったらしく、頭と身体が思うように動いてはくれなくなつて。レオンハルト殿下の元に、暫^{しばら}くの間休職をさせて頂けないかとお願いをしにやつてきた次第です。

「うん。私は大丈夫だからマリアベルはゆっくりと休養しておいで。色々あつて疲れただろう？」

「つ……レオンハルト殿下！ 本当に、本当にありがとうございます」

レオンハルト殿下の優しい言葉に瞳から涙が溢れ落ちそうになるのを必死に堪えます。

だつてここにはレオンハルト殿下だけではなく、側近の方や侍女長様もいらつしやる。だから恥ずかしい姿は見せたくない。

それにここでみっともなく泣いてレオンハルト殿下を困らせるなんて、侍女としての名折れ。だから私はポロポロと溢れそうになる涙を、侍女としての矜^{きよう}持^じで押し留めます。

「でも元気になって帰ってきたら、また美味しい紅茶を入れてね、マリアベル？ それにエリザベスも君のこと、すごく心配していたよ」

「え……エリザベス様が私のことを？」

エリザベス様はレオンハルト殿下の婚約者で、この国の未来の王妃殿下。

その美貌^{ひびょう}や品位、社交スキルは十五歳とは思えないくらい完璧で。流石はレオンハルト殿下の婚約者に選ばれるご令嬢だなど王宮でお会いする度に思っている私なのでございますが。

エリザベス様が私の心配……？

私とエリザベス様は、レオンハルト殿下の元で働く侍女と、レオンハルト殿下の婚約者という関

係。お二人が一緒にいる時に、お茶を淹れてお出しするくらいのもので、そこには接点らしい接点もなく、会話らしい会話すらしたことがないのですが。

「マリアベルはまったく気付いていなかったみたいだけど、エリザベスは以前から君に憧れていてね？ 私というのに彼女は君の話ばかり、妬いちゃうよね」

「え……憧れ、ですか？ この私に、あのエリザベス様が？ え、どこを!?」

「君の幅広い知識や、美しい所作しよさ、そしてお茶の淹れ方とかなんとか言っていたかな？ 確かに君は色々と凄いからね」

「え、あの？ 私のそれは貴族令嬢……いえ侍女としては全て当たり前のことで……エリザベス様に憧れられる点はどこにも見当たりませんが……」

「それを侍女の当たり前にしてしまうと、王宮で働いてくれる侍女がマリアベル、君一人だけになっちゃうね？」

「そんな大げさです、レオンハルト殿下。私の所作は貴族令嬢としては当たり前ですし……他もすべて此方で働き始めてから覚えたものでございます」

「これが当たり前か……だからエリザベスがマリアベルに憧れるのだろうね？」

私の根本となる知識や所作は、子爵家にあった本から得たもの。リリアンは本を読むのが嫌いだったから、本だけは私から奪いませんでした。

そしてあの子は勉強も嫌いで、私に家庭教師をすべて押し付けて逃げていました。だから私は多くの知識を得られたのです。

得られた知識と淑女教育は形のないもの。それはリリアンが唯一私から奪えなかった、私だけの大切なモノですが。あのエリザベス様に憧れられてしまう程の、モノでは決まてないはずで。

「ふふふ、レオンハルト殿下。マリアベルにそれを言っても無駄ですわ。その子は本当にそれが当たり前だと思っているのですから」

そう、おっしゃるのは。

レオンハルト殿下と私のやり取りを、ずっと後ろで見守っていた侍女長様で。

「侍女長様……」

「マリアベル、皆が貴女を心配しています。レオンハルト殿下のことはこの私に任せて頂戴。それに貴女は普段から働き過ぎなのです。レオンハルト殿下も快く許可して下さったことですし、ゆっくりお休みしなさいな」

と、侍女長様が優しい言葉を私にかけてくださいます。ギリギリの所で必死に耐えていた私の涙腺は、あえなく決壊し。そうして私はお休みをいただくことになったのです。

「いち、じゅう、ひゃく？ えーと……あれ、なんん!? き、金貨五百枚?」

何度数え直してみても、オズワルド様に渡された小切手には金貨五百枚と記載されております。これは私のお給金約十年分に相当する、決して少なくない金額です。私は第一王子の元でかれこれ五年ほど働いている侍女。ですから自分で言うのもアレなのですが、それなりに高給取り。

それなのにそのお給金十年分とは、なんともまあ気前のいいことでしょう。これだけの大金があ

れば当分は働かないで遊んで暮らせまし、小さな家くらいならこの王都でも買えます。

この金額は、それだけ私に悪いことをしてしまったという自覚があるのか。

それとも金銭感覚が狂ってしまっているかの、どちらか一方なわけございまして。

罪の自覚がオズワルド様の中にあってもなくても、結果は変わりませんし、あの酷い口ぶりから察しますとほぼ確実に後者なのでしょう。

けれど、こんなお金は全然嬉しくありませんし、受け取りたくなんてありませんでした。だってこれは婚約破棄の慰謝料という名目の手切れ金。

しかし大人しく受け取らなかつたらなにをされるかわかりません。身分の低い私は、侯爵家嫡男であるオズワルド様に逆らえるはずもなく、胸がモヤモヤいたします。

ですがそれが貴族社会。そしてこれがいま私の置かれた立場。

ですから、後で適当に散財してやりましょう。本当はこんなお金使いたくはないですが、手元に残して置くのもなんだか癪に障ります。

「もう絶対に、爵位が上の方とはお付き合いなんていたしません、絶対に」

というか、男性はもう本当に懲り懲り。いつそのまま独身。一生お一人様で、侍女の仕事に人生をかけて生きていきたいと考えている私なのでございますが。

本当はそう贅沢も言っていられない状況で、一刻も早く解決すべき問題があるのです。

それは両親と絶縁したことにより、私の身元を保証するものがなくなったということ。

このままでは確実に私は、侍女としてレオンハルト殿下の元で働けなくなってしまうのです。

小さな子爵家でも一応この国の貴族。王宮で働く私の唯一の後盾でございましたが、この一件でハインツ子爵家と私は無関係に。

ですからどこかの貴族家へ養女にいきなり結婚するなりして身元を保証していただき、後ろ盾となつて貰わなければいけないのですが。

私には結婚するつもりがありませんし、養女にいくようなアテもなく完全に八方塞がり。

だから本当はのんびりなんぞしている場合ではないのですが。

「さて、参りますか」

ドレスに着替えて、いざゆかんお茶会へ。

どうしてこの状況でお茶会!? と、疑問に思われるかもしれませんが。

つい先日、レオンハルト殿下に約二ヶ月の長期休暇を頂いた私は、王宮にある自室で一日なにをするでもなくただぼんやりと、時折うじうじと泣いて過ごしておりました。

そんな私の姿を、同僚の侍女が目撃してしまい。ありがたいことに、とても心配して慰めてくれたのですが。たいへんお恥づかしいことに、それがなぜかクロヴィス様のお耳に入ったらしく。

クロヴィス様は哀れに思ったのか、私をお茶会に招待してくださりました。そんな友人の好意を無下にするわけにもいかず、今から私はお洒落してお茶会に行くという次第で。

王都でできた初めての友人からのお茶会ご招待に、うきうきワクワクなんて私はしておりません。

「これでやっと私はオズワルド様の婚約者として表舞台に、王都のパーティーにも一緒に出られるのね？」

「ああ、そうだよ。もう私達の仲を引き裂く人間はどこにもいない。それに君は私の婚約者だけじゃなくて、私の妻になるんだろうリリアン？」

「ふふ、そうでした！」

自慢気にそう言ったオズワルドはリリアンの腰をグイッと引き寄せて腕の中に閉じ込め、チュッとその額にキスをした。そしてオズワルドにキスされたリリアンは満足げに微笑んで、お返しとばかりに唇にキスを返した。

……という、このやり取り。バカッブル二人はこの流れを既に何度も何度もやっていて、正直鬱陶しいなどハインツ子爵家に仕えるメイドは眉をひそめた。だが邪魔をすれば機嫌を悪くしたりリアンにクビにされかねないので、メイド達はコレが始まると仕事を手早く済ませ部屋を出る。

「リリアンは今日も可愛いな？」

「うふふふ！ 私、ずっと夢だったのです。好きな人と結婚式を挙げるのが！ しかもあの有名な教会だなんて、リリアンは嬉しいですわ」

「あそこは特別な教会だからね？ 本来は王族専用で、それ以外の者はいくら金を積んでも借りる

ことができないんだが……」

「あら、そうなのですか？」

「ああ、だからどうやってマリABELがああ教会を借りたのか私も知らなくてね？ 聞いた時は、驚いたものさ」

「へえ……？ 使えないお姉様でもたまにはいいことをなさるのね」

子爵家の人間は誰もマリABELが王宮でどんな仕事をして生活しているのかを知らない。それはひとえにマリABELが子爵家に帰って来ないから聞けない、というのも勿論あるのだが。

帰ってきた所で興味が無いから聞かないというのが、そもそもの原因だった。

「あはは。その点だけは彼女に感謝しなくてはいけないね？」

「でもいったいどうやって？ お姉様が王宮でなにをされているのか知りませんけど」

「それについては私も詳しくはわからない。知っていることといえば、王宮でメイドをしていることくらいかな」

そして婚約者だったオズワルドはマリABELの話を話半分に聞いて勘違いして覚えていた。

オズワルドという男はいつもそうで、自分が興味あること以外は聞いているフリばかり。

マリABELが結婚式について大事な話をしても、オズワルドは適当に相槌を打っていた。

だからマリABELは、最終的にオズワルドを頼ることは一切諦めて、たった一人で結婚準備をしていたのだった。

「ふーん？ メイドねえ……家を出て掃除と洗濯しているなんてお姉様はホント暇なのね」

「そんなことより、私の可愛いリリアン。あの日、君に出会えたことは本当に幸運だったよ」
「ふふ！ それにこのウェディングドレス、とっても素敵！ まるで私の為に作られたオーダーメイドみたい！ リリアンはまるで夢の中にいるようですわ」

「私もリリアンみたいな可愛い人と結婚ができるなんてとても嬉しいし、まるで夢のようだ」

「ねえオズワルド様？ 地味で野暮やぼつたいお姉様なんかがこの素敵なウェディングドレスをもし着てしまっていたら、ドレスがとっても可哀想だったと私は思うのです」

「あはは、それはたしかに。このウェディングドレスは可愛い私のリリアンが着てこそそのドレスだよ、それに君によく似合う。本当に君はどんなドレスを着ても可愛いし、素敵だ」

「まあ、オズワルド様ったら！ お上手なのですから！ もう大好き！」

そうしてリリアンは、楽しそうにクスクス笑う。

だってリリアンは姉から婚約者と結婚式、ウェディングドレスまで全て奪えたことが嬉しくて堪らないのだから。それにくわえてオズワルドと結婚すれば、自分こそが侯爵夫人。

地味な姉が侯爵夫人として自分より幸せになる未来なんて、プライドの高いリリアンには絶対に許せなかった。

だから姉の婚約者も、姉が得るはずだった地位も財産も名誉も、全て自分のモノにしたのだ。それにリリアンの腹の中にはオズワルドの子どもが既にいるから、跡取りを作れと言われることもない。

約束された幸せな未来、それを姉から奪ったという罪の意識はリリアンの中には欠片もない。

一方のオズワルドはマリアベルに慰謝料いしやうりょうを支払ったことで、多少は感じていた罪悪感がきれいさっぱりと無くなり気分は晴れやか。

そんなオズワルドは侯爵家の仕事も碌ろくにせず、子爵家をそれはもう頻繁ひんぱんに訪れて。日がな一日、リリアンと朝から晩までベッドの上で睦み合い、食事の時だけベッドから出てくるそんな姿に、使用人達は裏で馬鹿にして笑っていた。

そんな風に馬鹿にされていると微塵みじんも気づかない二人が向かうのは食事室。そこでは毎夜豪華な食事が、オズワルドの為に振る舞われた。

リリアンがオズワルドに嫁ぐことにより、侯爵家から子爵家への支援が期待できる。だから裕福とは決して言えない経済状況でも、できる限りオズワルドをもてなしていたのだ。

「あらあら、今日もたいへん仲のよろしいことで！ 結婚式が待ち切れない様子ね、リリアン？」

「ははは！ 私達も早くリリアンのウェディングドレス姿がみたいですなあ、オズワルド様？」

「ハインツ子爵、お邪魔しております」

「あら、お母様、お父様！ 今日はおズワルド様にお礼を言ったのよ！ 憧れの結婚式場と、素敵なおドレスをありがとうございますって」

「まあ……そんな結婚準備、いつの間に？」

「私はなにもしてないわ、お姉様が準備したものをそのまま使うのよ！」

「え、そのまま……使う？」

「今回借りられる教会が特別な許可が必要な所なんですって！ だからもしこの機会を逃したら二

度とそこで挙式できないみたいなの！ それにウェディングドレスもまるで私の為に作られたみたいで、素敵でね？ だから全部お姉様が準備したモノをそのまま使う予定なの！」

面倒な結婚準備を、自分は何もしなくていいなんて楽だとリリアンは喜んだ。

それをどんな思いで姉が準備していたかなんてリリアンは考えない。丁度いいから、自分で準備するのが面倒だからという理由で、姉の結婚式を横取りしたのである。

「あの……それは大丈夫なのでしょう？ なにか不都合が起きたりなどは……」

「ただ花嫁が変わるだけ、ハインツ子爵家と我が侯爵家の婚姻には変わらない。だからなんの心配も必要ありませんよ、ハインツ子爵」

「ああ、まあ……それは確かにそうですね！ よかったな、リリアン？ 幸せになるのだぞ」

「はい、お父様！ リリアンは可愛い花嫁さんになって、絶対にしあわせになります！」

◇◇◇

晴れ渡る青い空の下。

一張羅のドレスでお洒落^{しゃれ}をして、やって参りましたのは王宮のガゼボ。

そこには素敵なティーセットと予期せぬ豪華な顔ぶれがいらつしやいました。

「わあ……」

私を迎え入れてくれたのは、にこやかに微笑まれるクロヴィス様。

……ですが。一つだけ、どうしても気になって仕方のないことが、私の目の前にはございまして。

「あのう……レオンハルト殿下？ お寛ぎ中^{くわんきちゆう}にたいへん申し訳ないのですが……一つだけお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「ん？ なんだいマリアベル、私が答えられることならばなんでも遠慮せず聞くといい」

「いえ……この時間は執務をしているはずのレオンハルト殿下が、どうしてここにいらつしやるのです？ もしやサボリ……」

朝や夕刻ならば、レオンハルト殿下がこちらにいても問題はございません。

ですが今の時間は、通常ならばお仕事をされているはず。

「問題ないから、私のことは気にしないで！ マリアベルはお茶会を存分に楽しんで！ 私もマリアベルとお茶会を楽しむから！」

と、言われてしまいました。王宮のガゼボで優雅なティータイム。ですが、なぜこちらにレオンハルト殿下がいらつしやるのでしょうか。

「いや、ですが……そういうわけにも……」

ちらりと視線をむければ、なんとそこには給仕する侍女長様。

今日は同僚の侍女が給仕してくれるものだと思手^{しりょう}に考えておりましたが……私はただの侍女。侍女長様がいるならば、お手伝いしないわけにも参りません。

「ねえ、マリアベル？ 今日くらいはのんびりしよう？ クロヴィスが近くの街で美味しそうなケーキをたくさん買ってきてくれたんだよ。ほら、すぐく美味しそうですね？」

と、レオンハルト殿下は気さくにおっしゃいますが。

「私はただの侍女なので、いくら休暇中といえどもレオンハルト殿下と同席するわけには……」

そんなこと、畏れ多くて絶対にできません。

こうやって親しげに話し掛けて貰えるだけでも、たいへん有難いことですし。そもそも、この王宮のガゼボに招いていただけただけで、子子孫孫に至るまで語り継ぐべき榮譽。

もう十分だと同席を丁重にお断り申し上げていましたら。

「もうそんなのはいいから、いいから！ マリアベルほら、ここに座って！ このチョコレートマフィンに甘すぎなくて格別なんだ」

「え、あ……クロヴィス様！ こんな、いけません……」

クロヴィス様に手を引かれて、椅子に座らされてしまいました。

「さて……皆が席に着いたことだし、楽しいティータイムを始めようか？ 侍女長、マリアベルにもお茶を淹れてやってくれ」

「はい、かしこまりましたわ」

そうレオンハルト殿下が促され、侍女長様が私にお茶を淹れてくださいました。

「あの、侍女長様……私」

「さあマリアベル、温かいうちにどうぞ？ 私のお茶の腕前もまだまだ貴女には負けていませんのよ？」

「う……ではお言葉に甘えまして、いただきます」

「そんなに緊張しないで頂戴マリアベル？ ここにはレオンハルト殿下とクロヴィス様、そして私と貴女だけしかないのだから」

「それ、マリアベルが余計に緊張するヤツだと思えますよ、侍女長？ほんと昔から鈍感なんだから……」

「あら、そう？ そうかしら……」

レオンハルト殿下と侍女長様は、私の緊張を解こうと和やかな雰囲気を作ってくださいます。その優しい気持ちがとても嬉しくて、胸の奥が熱くなりました。

「それでマリアベル、実はここからが本題のだけど……」

「え、本題……ですか？」

「うん。君さ、実家のハインツ子爵家と絶縁してきたんだって？ 全部クロヴィスから聞いたのだけど」

「マリアベルごめん！ この間の話、君の許可を取らずレオンハルト殿下に話してしまった」

「あつ、それは……はい。大丈夫です、クロヴィス様。いずれご報告しなければと思っていたので」

「ごめん、力になってやりたくて……でも結婚は嫌だって、言っていたから……」

私の報告が遅れたばかりに、クロヴィス様に言いにくい事を言わせてしまいました。

「レオンハルト殿下、ご心配をおかけしたいへん申し訳ありません。早急にどこか私を養女として迎えてくれる家門を探します。ですから……」



「君にそのアテはあるの？」

「いえ、それは……親族をまわって聞いてみるつもりですが、侯爵家に婚約破棄された私を受け入れてくれるかは……」

「ほぼ確実に門前払いでしょう。どこの家も結婚間近に婚約破棄されて捨てられるような令嬢を、受け入れてはくれないはずで。もし受け入れて貰えても、家の利益の為に結婚を強いられたりすることは確実。」

「でも今の私は結婚なんてするつもりはまったくなくて、その要求を受け入れることができません。だから私は八方塞がり。」

「それだったら……侍女長の所に、伯爵家に養女にいくつていうのはどう？」

「侍女長様の所、ですか？」

「マリアベルささいいのなら、私は喜んで貴女を娘として受け入れるつもりですよ」

「あ……お気持ちはいへんありがたいのですが、私はもう誰とも結婚するつもりがないのです。ですから侍女長様の所へ養女にいつても、なんのお役にも立てません……」

「正直なところ。この願ってもない提案を直ぐに受け入れたい気持ちは勿論あります。ですが、政略結婚の可能性があるだけでも、今の私には苦痛で。」

「それ故に侍女長様には丁重にお断りしたのですが。」

「あら。うちに養女に來たからといって、政略結婚なんて無粋なことはさせるつもりはありません」

よ、マリアベル」

「え……？」

「貴女はしたいことを好きにしているのです。結婚は貴女が望むときにすればいいのですわ。それに我が伯爵家と縁を結びたい家門はたくさんあるでしょうが、こちらには一つもないのですよ。」と、おっしゃっていただき。

「侍女長様、私は……」

「貴女が驚くのも無理はありません。これは突然の話ですし、よく考えて決めて下さい」

「はい、ありがとうございます」

◆◆◆

王都にいる貴族達の間で、とある噂が流れた。

誰がそれを最初に言い出したのか、それはもう誰にもわからないし知る術もない。けれどその噂は瞬く間に広がっていき、どこか真実味を帯びていた。

——その噂とは。

第一王子のお気に入りの優秀な侍女が一方的に婚約を破棄されて捨てられたというもの。

しかも原因は相手の男の浮気で、侍女に落ち度はまるでなかった上に。相手の男は侯爵家の嫡男ちやくなんではあるものの、ただ爵位しやくいが高いただけでなんとともパツとしない普通の男だとか。

「完全にクズ野郎ですな。確か結婚式まで三ヶ月もなかったと聞きましたぞ」

「レオンハルト殿下のお気に入りの侍女なのに、なんて勿体ないことをする」

「しかも浮気相手を妊娠させたのですって！」

「まあ……婚姻前に？　なんてふしたらな！」

その噂を耳にした貴族達は口々に、婚約破棄をした相手の男を馬鹿にして笑った。

だって婚約破棄された噂の侍女は有能だと有名だったから。

だが、どうして一介の、それも子爵家出身の侍女が有名になったかといえば。それはやはり、侍女長ブリジット・フォーレが理由であろう。

誰に対しても分け隔てなく厳しく、王族からも恐れられている鬼の侍女長。そんな侍女長が認めた侍女、それがマリアベルだった。

それに加えて、女性嫌いだったレオンハルト殿下が初顔合わせで直ぐに気を許し、まるで本当の姉のように慕う侍女として彼女の顔は貴族達の間で知れ渡った。

この王宮に入入りする貴族で、彼女の顔を知らぬ者はただの一人もない。彼女のことを知らない者がいるとすれば、それは領地に引き籠もっていて王宮に寄り付かない貴族達や、仕事もせず遊び呆ける馬鹿くらのもの。

そんな侍女が婚約破棄された。それすなわち噂を聞いた貴族達にとつての大チャンスなのである。彼女が次の侍女長になることはほぼ確実。それに加えてレオンハルト殿下の覚えもめでたく、王妃様からの信頼も厚いと噂に聞く。

そして都合のいいことに彼女の家格は子爵家と低く、多少強引な手段を使って困っても問題にはならない。だから若い貴族の男達は、こぞってマリABELに言い寄ろうとした。

婚約破棄をきっかけに長期休暇をとっていた彼女が、侍女として王宮に戻ってきた今、男達の関心はますます高まっているのである。

「ねえ、その君。探している書物があるんだけど、少し手伝ってくれないかい？」

第一王子からの頼まれごとで、王宮の書庫に書物を探しにやってきていたマリABEL。

そんなマリABELに若い貴族の男は声をかけた、探し物などないのに。

「え？ あ……はい。私でよろしければ喜んでお手伝いをさせていただきますが、どういった書物をお探しでございましょう？」

「んー、そうだね、題名はなんだったかな……？」

見ず知らず貴族の男に話しかけられて一瞬困惑の表情を見せたマリABELだったが、すぐに気を取り直してにやかな笑顔を浮かべる。どんなときも冷静に対応する、それが侍女マリABEL。

——だがそんな彼女はもう、その辺の貴族がおいそれと近付けるような状態ではなかったのである。

「……探し物なら、この私がお手伝いしましょうか？」

二人の背後から冷たい声が聞こえる。振り返るとそこには——

「あら、クロヴィス様？」

「ク、クロヴィス・ルーホン卿!」

「こんにちは、オブル殿？ 御父上のエシレ伯爵は息災でいらつしやいますか？」

「えっ、ええ。お気遣いいただきありがとうございます」

クロヴィスの口調は至極穏やか。けれどその目はまったく笑ってはおらず、威嚇でもするかのように伯爵家の子息を冷たく見据えていた。

「そうですか、では御父上によりしくお伝えください」

「え、ええ……で、では私はこれで……!」

そんなクロヴィスの気迫に、伯爵家の子息は逃げるようにその場から離れる。ルーホン公爵家の人間に逆らう貴族などこの国にはいない、もしいるとすれば世間知らずの馬鹿だけなのである。

一介の侍女ではないマリABEL。それなのに、なぜか彼女の近くには常に第一王子の騎士がいるし、話しかけようとするとクロヴィスが直ぐに間に入ってきて邪魔をする。

だが、なぜこんなことになっているのかと言えば。

オズワルドのような不埒な男をマリABELに近付かせない為にと、クロヴィス主導で厳戒態勢が敷かれ、それにレオンハルトも喜んで協力した結果であった。

だが、厳重に守られているマリABEL本人はというと。

「クロヴィス様……こんな所で油を売っていて大丈夫なのですか？ この時間は忙しいでしょう？」

「えっ」

「宰相様が困っておられましたよ？ 近頃クロヴィス様がお仕事をせず、銀獅子宮にばかりいると……」

「あ。いや、それは……！」

「あまりこんなことを申し上げたくはないのですが、友人として申し上げます。任されたお仕事を中途半端にするのは如何なものかと私は思います」

「はい……直ぐ仕事にいつてきます」

と言つてマリアベルはクロヴィスを宰相さいしやうの元へと送り出すのである。

「相変わらず真面目ね、マリアベルは。それでどうだった長期休暇は？ 少しは休めたかしら」

「マチルダさん。はい、おかげさまで心身共に回復いたしました。これも全て皆様のおかげだと……」

そんなマリアベルに話し掛けてきたのは、侍女仲間である伯爵令嬢のマチルダ。マリアベルとマチルダは先輩後輩の仲で、一年ほど後輩のマリアベルは姉御肌あねごはだなマチルダを慕っていた。

「マリアベル、遠慮はなしなし！ 普段貴女にはみんなお世話になっているのだから、こんなのはお互い様！」

「つ……ありがとうございます」

「でもね、マリアベル？ あれでは少しクロヴィス様が可哀想よ、貴女を心配してお仕事を抜け出して来てくださったのに……」

「えっ、そうなのですか？」

「だってそろそろでしょう？ 貴女が挙げるはずだった結婚式の予定日は」

「あ……色々忙しくて忘れていました」

「忘れていたって……貴女ねえ？」

「私はてつきり、クロヴィス様はここでお仕事をサボっていらっしやるだけだと思っておりましたが、私の心配を下さっていたのですね……申し訳ないことをしてしまいました」

「後で謝っておきなさいな、きつとクロヴィス様、落ち込んでいると思うから」

「そうですね……直ぐに謝らねばいけません。友人の気遣いを無下にしてしまうなんて。教えていただきありがとうございますマチルダさん！」

「あ、うん。ほんと……可哀想なクロヴィス様」

——ルーホン公爵家の嫡男ちやくなんクロヴィスが、侍女のマリアベルに恋をしている。

それはレオンハルトに仕える侍女達の中では、周知の事実。

知らないのはマリアベル本人だけであつた。

それは遡ること約五年前。

レオンハルトの新しい侍女となったマリアベルは、まだ十四歳だったクロヴィスには大人っぽくてとても魅力的に見えた。同年代の令嬢達と違い、お淑やかで大人の女性らしく落ち着いた雰囲気のマリアベル。好きにならずにはいられなかったのだ。

クロヴィスは、マリアベルにまったく相手にされなくても、あの手この手で決死のアピールを繰り返した。結果、クロヴィスの想いは侍女達にバレバレで。

オズワルドとマリアベルが婚約した際は、皆がクロヴィスを慰めた。